「三岡へっつい」 とは

由利公正が謹慎中に発明したとされる「かまど」
＜特徴＞火力が強く薪が従来の1/10で済み、釣鐘を逆にしたような鉄釜に横穴を穿ち、下半分を部厚い土で固めたもの。1865年～1935年頃に福井県下で普及していたとされる。

『経綸のとき』(尾崎護著　東洋経済新報社)p344～

(慶応二年(1865年)六月にたばこ屋で沢吉、柳兵衛、せんと会うくだり　p343)
　八郎が話し出した。もうすっかり昔の調子だった。
「最近へっついの研究を始めた。飯を炊くときにやたらとへっついがけぶってかなわぬとタガがブツブツ言うのを聞いているうちに、昔母上や妹のシゲが同じことを言っていたのを思い出して、どうせ暇だから、女達のために<u>よく燃えてけぶらないへっつい</u>を作ってやろうと思いついた」
(～中略)「もう少しというところだ。鉄砲や火薬を作っていた頃の知識が結構役に立つ」
(～中略)<u>三岡式へっついが福井城下に普及したのは、この時からしばらく後のこと</u>である。

『炎の如く　由利公正』(大島昌宏著　福井新聞社)p240～

「タカ、また売れたぞ」年も暮れようとする日、八郎は弾んだ声をあげた。苦心の末完成させた新型へっついが好評で、毛矢町一体はむろんのこと領内各地からも引張り凧なのだ。<u>釣鐘を逆にしたような鉄釜に横穴を穿ち、下半分を部厚い土で固めたもの</u>である。数日間古いへっついを睨み熱効率の良いものをと考えていて、ふと韮山塾で学んでいたころ見た反射炉の応用を思いついたのだ。暇にまかせて幾度も試行錯誤をくり返し、ようやく炎の熱を逃がさず、土の中に埋めることで保温力も増すことに気づいた。タカが試してみた結果、<u>薪が従来のものの十分の一で済むというすぐれもの</u>であった。

『竜馬がゆく』(司馬遼太郎著　文春文庫)　第八巻p374

三岡八郎というのは、ふしぎな頭脳のもちぬしだった。国家経済をまるで掌をさすように論ずるかとおもうと、へっついの発明をしたりする。閉門中、退屈なあまりにこの新案をおもいつき、作りあげた。<u>従来のへっついよりもはるかに燃料が節約でき、しかも火力が強い</u>。この男の発明したへっついは、<u>昭和十年まで「三岡へっつい」とよばれて福井県下で用いられていた</u>。